



Live Sound Showcase: U2— Speaking from Experience

昨夏の巨大スタジアムツアーから約1年。U2がもう一度その会場に舞い戻り、Innocence + Experienceのコンセプトツアーを完結させる。U2を40年間ミキシングしてきたサウンドディレクターのJoe O'Herlihyがこのツアーについて語った。

Clive Young Jun 22, 2018

「U2のshowに私が最初に携わったのは1978年9月の終わりでした。」とU2のサウンドディレクター、Joe O'Herlihy氏は振り返る。アイルランド出身のロッカー達がステージに立つ1時間前、私と彼はそのステージ上にいた。40年前、私がNY州のUniondaleにあるNassau Veterans Memorial Coliseumにいた頃、彼はCorkのArcadia Ballroomのバックステージにいたという。「私はアイルランド人のギタープレイヤーRory Gallagherと、73年から78年まで仕事をしていました。予定していた仕事を終えて、家に帰ろうと決めたところだったんです。私がU2と出会ったのはそれから約3週間後だったのですが、その後また偶然会ったのです！その後のことは皆さんもご存知の通りです。」



U2 サウンドディレクターの Joe O'Herlihy、DiGiCo SD7 と共に

続く40年の間には、今回の巨大ツアー(Epicを目指しているバンドからしても野心的なコンセプトを持つ3部作ツアーのファイナル)にも関わる多くのモチーフが生まれた。2015年に76公演行われたInnocence + Experienceワールドツアーは、U2の生涯をバンドの中で“無邪気な”十代の若者たちとして位置付けた、ゆるやかで自伝的なshowとなった。その後、2017年にはスタジアムに舞い戻り、アルバムJoshua Treeの30周年記念として、Joshua Treeツアーと題し51公演行った。(コンセプト的には、バンドが経験を積んだ場所)。そして現在2018年、テーマを“世俗的な落とし穴との格闘”としたExperience and Innocenceツアーでこのプロジェクトは完結となる。



アリーナ周りにフライングされた Clair CO-12 では、左右のステレオフィールドが互い違いになっており、観客がどこに座っていてもステレオイメージが届けられるようになっている。

音が重く聞こえる場合でも(時々本当にそうなのですが)、毎回の show に組み込まれている制作量ほど重くはないという。何度となく言うが、U2 の音響を担っているのは Clair Global である。この show のトレードマークは、2015 年のツアーと同様、アリーナの長さには渡ってバンドが演奏できる特別なランウェイステージであり、ファン 1 人 1 人に一時でも会場が一番の座席を用意できる仕様となっている。メインステージは会場を縦に分けるランウェイに通じ、ランウェイは円形 B ステージ(“Experience”の“E ステージ”と呼ばれる)に繋がる。ランウェイの頭上には大型の両面スクリーン(最初は The Divider と呼ばれていたが、今では The Barricage というニックネームが付けられている)があり、映像が映し出されるのはもちろん、時折画面が分かれたり、途中でバンドメンバーがその中に入ることもある。

O’Herlihy の課題は会場のどこでメンバーがパフォーマンスしていても、サウンドを失わない事であった。その答えとは、アリーナフロア頭上で楕円形のリングを作り Clair Cohesion CO-12 PA アレイを左右交互に 12 か所ハンギングすることであった。それを Cohesion CP-218 サブ 3 本のアレイを 8 か所ハンギングしてバックアップした。これはアリーナにバスのエネルギーをコントロールしながら送るカーディオイドを使うためだ。O’Herlihy: 「建物全体のステレオイメージとなるので、どこにいても常にステレオイメージが得られます。素晴らしいのは、各キャビネットが観客の 75ft 以内にあることです。かなり近いですが、システムがストレスにはなりませんのでオーディオの質は単純に 1,000%です。システムの音分布が一定のエリアへ集中しているからです。決してうるさくはありません。もしうるさいと思ったら、私の所に来て引っぱたいてください。」



毎回、Shure Axient ワイヤレスマイクで歌い上げる Bono

一般フロアをカバーするのは、メインステージ、ランウェイ、E ステージの前にダウンフィル、センターフィルとして置かれた 32 本の Cohesion CO-10 と、ステージとランウェイに組み込まれた 18 本の CO-8 である。O'Herlihy: 「このランウェイずっと、客席から 4ft 以内には必ずスピーカーがあります。これらスピーカーのレベルの強さは自動的にタイムアライメントされ、観客に音の印象を与えます。Bono が立って歌っていると、あなたに向かって歌っているように聞こえます。それこそが対話性を生み出すものだと思います。U2 とは観客とコミュニケーションするバンドです。それができないのは趣旨に合いません。すべてが接続性なのです。」



アリーナフロア周りにステージを配置することで、数曲は全てのファンに最高の座席を与えることができる。

システムは遍在するオーディオを提供するように設計されているため、2 つの CO-12 アレイ間で比較的等距離であれば、FOH エリアは会場のどこにでも配置することができるので、傾向としてはスタンドの数段あがった客席内になることが多く、O'Herlihy は観客の声を聞くことができ、また重要ポイントとなる show の全貌を見ることができる。FOH エリアの中心にあるのは DiGiCo SD7 で、ツアーで持回る 8 台のうちの 1 台である。8 台全てが 96k で使われている。O'Herlihy はエミュレーションとプラグインに問題はないと言うが、Manley VoxBox、Avalon VT-737、Summit Audio DCL200、TC Electronic、Yamaha、Lexicon などのヴィンテージユニットで構成された 2 つのラックを使用している。単に、そうすることができるからだ。



ステージ下に配置された Bono のモニター卓。Alister McMillan がミキシングしている。

ステージ下に広がる巨大なモニターワールドは、Sennheiser のワイヤレスシステムを中心とした Niall Slevin の RF 機材と、Alastair McMillan (Bono のミキシング)、CJ Eriksson (Larry Mullen と Adam Clayton)、そして Richard Rainey (the Edge) が使用する DiGiCo 卓などで構成されている。それぞれバンドメンバーを映し出すビデオモニターを見ながらミキシングを行っている。

O'Herlihy: 「各卓のインプットは 128 で、何も複製していません。メンバーが E ステージにいる時は特定のチャンネルを使用します。Barricage に入るとき用のチャンネルのセットも別にあります。メインステージにもそれ用のチャンネルがあります。重複させて複雑にするようなことはありません。複製すると、そのためにエラーを起こす確率も上がります！また、我々は 100%リダンダンシーを信じています。私たちが DiGiCo SD7 を使用しているのはこの機能のためです。各卓にはエンジンが 2 つあり同時に起動しているので、1 つのエンジンで障害が発生すると、自動的にもう 1 つに切り替わります。どんなに耳を鍛えても、その変化を聞きわけることはできません。これは私たちが行っていることー世界で最大のツアーの大部分です。ミスは許されません。これがこの製品を使用する理由です。」

これらの卓や 200 本以上のスピーカーなど Clair Global からの機材は、初期のころのバンドに音響会社が用意した機材とは全く違うという。

O'Herlihy: 「Clair との関係はとても長く、そして信じられないほど素晴らしいものです。Clair Global との最初の show は 35 年前の 5 月 11 日に NY で開催された The Palladium で、今年 5 月 11 日は私たちの 35 周年でした。その夜はラスベガスで show が行われていましたが、私は Clair Global に『皆さん、35 年前の今日におめでとう！この気持ちを皆さんと分かち合いたかったのです。』とメールを送りました。すると、皆返事をくれました。Dave Skaff は『機材をいくつか余分に NY まで車で運んだことを覚えています』、と。すると Troy Clair も『その show のためにトラックに積み込みしたのを覚えている』と話に加わってきました。Troy は現在、同社の社長兼 CEO です。」



Joe O'Herlihy (左)と Jo Ravitch

O'Herlihy: 「大事なものは人、本当にそうなのです。世界で最高の機材を手に入れることができても、それに詳しい人が背後にいないとただの機材なのです。私たちは show を 1 日 2 時間行いますが、あと残りの 22 時間、スタッフはお互いこうまくやっていかなければなりません。バスで移動したり、色々な事を一緒にやる必要があります。ツアーは続いていくのです。私はこのツアーにいる人の多くと、長い時を一緒に過ごしてきましたし、シニアシステムエンジニアの Joe Ravitch は、あの Palladium のギグをしてから実際私と 35 年過ごしてきたんですよ。」

U2 ツアーの人間関係が家族のようだ、と思った方。あながち間違いではない。

O'Herlihy: 「私の娘、サラは今ここでツアーマネージメントとして働いています。(Barricage に向かいながら) このスクリーンは私の息子、Mark が作ったスクリーンです。彼は LA の PRG で働いています。1990 年以来ずっとビデオを提供してきた会社です。サラは周りが男性ばかりで育ちました。彼女が生まれた 1981 年 4 月 12 日、実際に U2 ツアー中でシカゴの Park West にいたので、その時生まれた彼女の事はみんな小さなころから知っています。」

それでも、40 年に渡る U2 のミキシング、制作との関係、テクノロジーの発展、子供の成長、伸び続ける期待値などを元に、今、彼はどのように彼の仕事を見ているのだろうか？

O'Herlihy: 「なんというか… 私は世界で一番の仕事をもらったと思っています。毎朝目を覚ますたびに、自分の仕事が好きだと思えます。どれくらいの人々が毎朝目を覚ますたびに、仕事が大嫌いだと思うのでしょうか？私は絶対に恵まれています。それを認識しています。そういう風に毎日思っています。」
それはまさに Experience(経験者)の声に聞こえた。